



Survival
of the state

国家の存続

人生
方程式

(Life equation)

西川正孝
Nishikawa Masataka

志摩と大阪を舞台にした男女の物語だが、
主人公の言葉を通して国家自滅の危機に直面した
日本の人口問題や経済状況、日銀の政策に鋭く踏み込み、同時に
地震対応型の建築技術や津波(および水害)対策用のタワー建設構想などが語られる。
本書は『恋のおばんざい—天下国家への手紙—』の姉妹編であり、

これからの町づくりや国家の在り方について
提言した著者の意欲作となっている。 ブックウェイ

◇好評既刊本のご紹介

『約束の詩—治まらぬ鼓動—』

「曲が出来たら詩を付けてね」

美しいピアノの旋律と、僕を見つめる優しい微笑み。永遠に続くと感じていた幸せのときに、彼女は突然いなくなってしまう——

昭和30年代、三重県其自然豊かな学校を舞台に描く懐かしくて初々しい恋愛物語。

定価：本体1,300円+税



『二重奏—いつか行く道—』

星空の下、あの人と歩いた
雪原の白を思い出す

その日、2人の奏でるメロディが重なり互いの人生が交錯し始めた。

会社の危機や両親との別れ、突然発症した原因不明の病…予期せぬ出来事が運命を加速させる。生きる喜びと悲しみを知った恋人たちの永遠の記憶。定価：本体1,400円+税



国家の存続

Survival of the state



(Life equation)

西川 正孝

Nishikawa Masataka

ブックウェイ

目次

一、潮香と潮音	3
二、街の明日	33
三、人生方程式	65
四、国家自滅への憂い	78
五、将来への希望	97
六、国家の存続	117

一、潮香と潮音

志摩にある堤防の上に寝そべって、智則は何するともなく遠くの水平線に目を向け、紺碧の海と青い空に純白の雲が流れてゆく様子をノンビリ、ボンヤリ眺めている。その静かで穏やかな光景の中を時折白い船が通る。青と白のコントラストが美しい。

近くは入江になっていて波の音はするが、海面は静かに揺れているだけである。遠くは外海で、あの白い船が見えたり見えなくなったりする。多少波は大きいのだろう。ここにいると、海独特の湿っぽさと香りを含んだ緩やかな潮風が涼を運んでくる。直下の小さな砂浜に眼をやると、手前に小さな浅い湾処わんどがある。堤防を挟んで海と反対側に稲田があり、稲田の間の溝川が堤防をくぐって湾処に流れ込んでいる。湾処の出口は細くなって海につながり、その流れに向かい海から小魚の群れが集まってきて、この湾処に自由に出入りしている。

初夏の日差しの中、一人の老人が入ってきた小魚を捕っていた。その捕り方が面白く、実に悠長である。魚が入ってくるのを待っていて、網の片方を砂浜の杭に縛り付け、もう片方は長い綱につないであって、綱を手繰り寄せ、今まで自由に通れるよう

にしていた入口を閉じてしまい、湾処の魚を一網打尽にする。それを気長に時間を掛けて何度も繰り返すのである。へ上手に地形を利用してゐるものだ」と智則は感心しながら見ていた。少年の頃、田舎の川端で腹這いになり、流れの緩やかなところで釣り糸を手に魚の前へ餌を持つてゆき、何時間もそうしていたことを思い出す。ここであらうしてあれば、心も悠長になる。

老人のところへ若い娘が弁当を持ってやつてきた。孫娘であらうか、食べる支度を始めた。へああ、もう昼飯の時間か」と思った。食べられるように用意された頃、「おい、その若いの、ここへ来て一緒に食べろ」と老人が言う。ためらっていると、「早く来い！ 冷めるぞ」と再び親しげに智則へ声を掛けた。

周囲を見回しても自分しかない。智則は自分を指さして「僕？」と確認した。「お前しかない、早う降りてこい！」

老人もこちらを見ていたのだ。

智則は砂浜へ降りた。老人は自分の分を分けて、智則に与えた。それに、先ほどから捕っていた小魚も塩焼きにした。「美味い！」と智則は言った。老人と娘は顔を見合せて微笑んだ。この場所や雰囲気、二人の心遣いが一層料理に味を添えた。

「海は好きかい？」と老人は言った。

少し間をおいて、「今日は好きです」と答えた。

「なんじゃい今日はとは？」

「穏やかな海と」と言いかけて、「今日のここでの何もかもが好きです」と言い直した。
「可笑しな答えじゃのう」

老人は笑って娘に顔を向けると、娘も口に手を当てて笑っている。その仕草が初々しく、愛らしく、たおやかに見えた。老人は続けて言った。

「どこから来たのじゃ？」

「大阪です」

「堤防の上での様子を見ると、ノンビリするのが好きらしいが、怠け者か、それとも逃避か？」

「両方です」

「面白い奴じゃのう」

「僕も三重県の山中、田舎生まれの田舎育ちです」

「この娘は儂^むの孫じゃが、今年、短大を卒業したものの都会に出たがっつてのう」
「田舎が良いってことを教えてやってくれ」と続けた。

「陽子というんじゃ」

陽子は会釈した。しばらく三人で話しながら食べた。

その後、智則は砂浜で横になった。娘は帰っていった。老人は少し休んで、また作業を始めた。智則はこのまま、この気分に関りたく、砂浜で眼をつむった。

周囲が女性の声で騒がしくなつて我に返った。少し眠つてしまつたようだ。目を開けて周囲を見回すと、智則を取り囲むかたちで海女が十人ほど座っている。それぞれの傍らには海草や魚介などが入っている背負い籠が置かれていた。浅くなつた磯での作業を終え、この狭い砂浜で休憩をしていたのだつた。彼女たちは喋りながら、自分たちが捕つたウニを上手に割つて食べている。

「食べなよ！ お兄さん」

起き上がつて座つた智則に一人がウニを割つて差し出したが、一応遠慮した。続いて二人ほどから勧められたが、同じく遠慮した。

「美味しいよ、食べなよ」

また別の海女が勧めた。

「ありがとうございます。せっかくだから頂きます」

あまり遠慮するのも失礼と思い、割つてくれている中の黄色い部分を食べた。

「うん、美味しい」

「街で食べると高価だろう？」と海女は言った。

智則は頷いた。

「どこから来たの？」と聞かれ、「大阪です」と答えた。

先ほどから智則にウニを勧めていた他の海女たちが、そのやりとりを見ていて「その人のは食べて、私のは食べてくれないの？」と次々と言った。

智則は首を振り、「遠慮していたのですが、度々勧めて下さるので」と言った。

その刹那、割ったウニを持った手が周囲から伸びてきた。若い女性から中年までいる。高級品をたらふくタダで頂くことになった。

たわいもない話をしながら味わっていると、「おい！ 若いのが、よくモテるのお」と様子を見ていた先ほどの老人が言う。

「平さんにはあげないよーだ」と海女の一人が返した。

「平さん？」と智則は問うように言った。

「平助ていうのさ」と別の一人が教えてくれた。

「逆さに読んだら、スケベイさ」と、また別の一人が言って、皆、笑い転げた。

屈託なく本人に聞こえる大声で、こんな話をしている。平さんは皆に好かれているんだと感じた。

「あんだ、今夜どこに泊まるの？」と一人の海女に聞かれた。

「こらっ！ 後家！ 誘惑するな。今夜は儂が美味しいもんを食わしてやるんじゃ」と

平助が言った。

「ああそう。そりゃ残念やわ。あんた、平さんに気に入られたみたいね。あの爺さんは減多と人を信用しないのよ。あれでも元、村長さんや」

そう海女が言った。

智則は今後の行動を、この面白い雰囲気とやりとりのなりゆきに任せることに決めた。海女たちはしばらく駄弁って、また海へ入っていった。

智則はこの安らぎの中で再び寝そべると、日頃の疲れもあつてか、またしばらく眠ってしまった。

「おい！ 若いの」

その声で目が覚めた。

「いつまでも若いのではあかんの」

「名前を聞いておこう」

「山野智則です」

「先ほどのこと、本当ですか？」

「美味しい物食わすということか？　ハ、ハ、ハ、ハ」と笑って続けた。

「今夜、農の家に泊まってゆけや。今夜の宿決めてあるのか？」

「いいえ」

「呑気な奴じゃ」

「何とかなると思つて」

「何とかなつたというわけか。それじゃ決まつた」

「はあ、それはありがたいことです……突然で、ご迷惑では？」

「なんの、遠慮はいらん。もうじき、船で迎えに来る。今日はここで隠居の暇つぶしさ。山野智則さん、智さんでいいか」

そんなふうには平さんは親しみを表してくれた。

「光栄です」

「智さん、車かい？」

「はい。明日まで預かつてもらうよう駐車場に頼んできます」

そう言つて智則は姿を消し、しばらくして浜辺に戻つてきた。

平助の家の苗字は牧という。牧家は漁と真珠の養殖をしているのだということを迎えに来てくれた船の上で聞いた。

浜島の漁港から陸に上がつて、平助の家に着いた。智則が一緒だったので、陽子はビックリして態度や言葉遣いまで変わったようで、平助が「色気付きおつて」と言う

と、陽子の顔は赤くなった。もう一度会いたいと思つていたところ、平助が連れて歸つたものだから嬉しかったのだ。

「儂の友人の智さんじゃ、面倒見てやつてくれ」

「お爺ちゃんが友人じゃかわいそうよ」

「何又カス、嬉しいくせに」

「知らない」と陽子は台所の方へ走つていった。

「突然、ご迷惑をお掛けします」

「いいえ、よくおいで下さいました、自分の家と思つて寛くつろいで下さいませ。不自由なことがあれば、何なりと言つて下さい。夕食の支度ができるまでお風呂にでもお入り下さい。陽子！ タオルや着替えの支度をして、ご案内しなさい」

陽子の母、菊がそう言った。

勧められるまま風呂に入らせてもらった智則は（牧家の人はキサクで良い）と思つた。陽子と母は急な来客に台所で忙しく動き回つていた。

夕食は家族全員揃つていて、智則がその中へ自然なかたちで加わつた状態だった。特別扱いではなく、家族と同じ扱いだった。

「海の堤防で、眠つてしまいました」と智則が言ふと、皆笑つた。

「儂が魚を捕っているのを、堤防の上で寝そべってジーツと見ておるんだ」

「目を覚ますと、実に悠長で、上手く漁をしていらっしやるのを見て、気持ち安らぎ、幼い頃の郷愁に浸っていたんです」

「そうかい。よく聞いておくんだぞ、陽子、田舎が良いってさ」

そして、ここからが大事と言わんばかりに続けた。

「あれからな、智さんよくモテてな。海女たちに囲まれて、捕ったウニを割って女たちからアーン、アーンと口に入れてもらっておったんや。海女の一人なんか『平さんにはあげないよーだ』だもんな」

「お爺ちゃん、僻^{ひが}んでいるの、それとも妬^{ねた}いてるの」と陽子が言った。

「後家が一人、今夜、智さんを引っ張り込もうとしてな」

「オーバーよ」

「智さんを連れてきたのが嬉しいくせに」と平助が言う。

「まあ、お爺ちゃんたら、もうー」

「お料理、みな美味ですね」と智則が言って、ある料理を箸でつまむ。

「それ、私が作ったのよ。どう？」と陽子が言った。

「美味しいです」

「これ！不味いとは言えないじゃないか」と、父の平太が言った。

「いえ、本当に美味しいです」

「智さんは優しいの」

忙しく皆のおかわりを腕によそいながら、母の菊が言う。

和やかな会話をしながら食事が続いた。陽子の家族は、祖父の平助、父の平太、母の菊、兄の四郎の五人である。

夕食後、智則は平助の好きな将棋の相手をした。「こりゃ困った」と言いながら平助は凄い手を打ってくる。陽子がお菓子とお茶を運んで来て、「お爺ちゃんのお守り役ね」と笑う。

「どうじゃ、明日、船で沖釣りに行くか？」と平助が言った。

「連れてって下さい」

「おい、平太、聞いての通りや。用意頼む」

「うん、分かった」

「お世話掛けます」

「なあに、漁に智さん連れて行くだけや。気にしなさんな。王手！」

「参りました」

「お爺ちゃん、花を持たせてもらって」と陽子が言った。

寢床や食事など、陽子は積極的に智則の世話をし、一段落ついたところで風呂へ入った。

「お母さん！ シャンプーとリンス取ってー」

風呂場から母親に甘える陽子は、自分の用意を忘れていたのである。

智則の寢室は落ち着いた客間だった。昼間の疲れや今日一日の心地良さを感じながら、自然なもてなしに感謝しつつ、自分を信じてくれる安らぎにも似た気分で、智則は良い眠りについた。

漁村の朝は早い。船のエンジンの音で目が覚めた。早朝から平助の厚意で船に乗り、沖へ釣りに出た。船の操作は陽子の父平太がして、平助は智則に釣り方を教えた。陽子も乗り込んでいた。

「こいつは小さい頃から女のくせに、よく一緒について来てたのや。漁も泳ぎも上手になったが、短大に入ってからスッカリ止めていた。でも今日は珍しく自分から行くと乗り込んできたんや。智さんのせいやで」

「嫌やわ。お爺ちゃんたら」

陽子は昨日のたおやかさとは違い、出で立ちや動きもさっそうとしていた。

入り江では良かったものの、外海へ出てから智則は船酔をした。智則にとって波は大き過ぎた。智則は撒き餌をしているかのごとく、口から海へ吐き続けた。船上で臥せってしまい、釣りどころではなくなった。陽子は一生懸命介抱したが、他の二人は「そのうち慣れるさ」と笑って見ていた。

生きた心地がしない智則は、へこのまま船がひっくり返ると確実に死んでしまうと思つた。平助と平太は鰯^{あじ}とイサギがよく釣れて大漁だった。

「智さん、後で刺身にしてやるからな」

二人は嬉しそうに言いながら喜んでいたが、智則はともそのような気分ではなく、早く陸に上がりがりたかった。

「陸に上がれば、すぐ元に戻るさ」と平太が言った。

一旦、智則と陽子と捕った魚を陸に上げ、平助と平太はまた沖へ出ていった。

智則は家の中でしたら横になり、気分が戻った頃、陽子の運転する軽トラックの助手席に乗って、預けてある車を引き取りに行った。

夕刻、近くの船着き場でサビキ釣りをした。面白いように鯖^{さば}が揚がった。陽子が時折様子を見に来ると、二人で馬鹿話をした。

「四国へ釣に行ったときに聞いた話なんだけど、釣り糸を体に括り付けていた釣り人

が大魚に持つて行かれて、数日後、大魚とつながったまま遺体で発見されたことがあつたらしい。そんなこともあるんやね」

智則がそう言うのと、「鰯いわしに釣られないように気を付けてね」と陽子はからかうように言った。

「酔わなければ、船も楽しいのにな……」と智則が言った。

陽子は都会、特に東京へ出たがっていたが、都会に信用できる知人はいなかった。

夕食後、智則のことをすっかり気に入った平助は、陽子の両親と相談して少しの間、大阪で暮らさせてやろうと思ひ、智則にそのことを話した。

「僕でいいのですか？」

「智さんなら信頼できる」

「えろう、買い被られたものや。陽子さんは綺麗だし、僕も男ですよ」

「ハハハ、嫁にしてもいいぞ、智さん」

平助はもう決めていた。智則も陽子も赤くなった。

「愉快、愉快」

平助は二人をからかって、嬉しそうにしている。

気の早い平助は、帰りに連れて行ってくれるよう智則に頼んだ。

「住む所も確保しなければいけませんし…」と智則が言う。

「智さんの住み家、部屋の余裕ないのか？」

「物を処分すればなんとか」

「じゃ、それで決まりや。家賃も要らないし」

「でも、同じ屋根の下に二人きりでは…」

「煮るなり焼くなり好きにすればいい。女の一人暮らしのほうがもっと心配じゃ」

「はあー」

「陽子と同棲すると便利になるぞ。まず家事ができるし料理も美味い。ところで、どんなところで暮らしているのや？ ボロ家か？」

「結構新しいマンションです。この漁村の暮らしとは大分変わりますよ」

「ワー、私、マンション暮らし憧れていたんです」

「陽子も乗り気のようにじゃの」

「東京でなく、大阪でいいのですか？」

智則が尋ねると、智則の目を見ながら嬉しそうな顔をして「はい」と答えた。その素直さと同時に、初々しい瞳の中に気のせいか艶めかしさも感じた。

「智さんに惚れよって」

平助がからかうと、陽子は赤くなつた。

「都会に出て何をしたいのですか？」

「何か手に職をつけたいと思っています」

「こんな素晴らしいところ、素晴らしいご家族、すぐ恋しくなりますよ」

「そうなって戻ってくれば、それも良し。子供を連れてくればなお良し。ハハハ」

平助は機嫌が良い。

「僕と一緒に暮らしている間は、家賃と食費は心配要りませんが……」

「僕の自制心が……」

「ハ、ハ、ハ、まだそんなこと言っているのか？」

「ところで智さん、仕事は何してるのや？」

「技術者です」

「そうか。すまんが、面倒見てやってくれ」

「僕でよければ引き受けました」

智則はきっぱり言い切った。

「これで決まった。智さんが帰阪するとき、くつついて行けるように用意しておけ」
平助は陽子に言つて、なりゆきを聞いていた陽子の両親にも了解を取った。

「しかし、この村は良いところですよ」という智則の言葉に、「聞いたか、陽子」と
平助は嬉しそうに言つた。

朝、智則が海岸を散歩していると、二人の若者から横柄な態度で道を尋ねられた。その後、彼らは砂浜に下りて車を走らせた。テレビのCMで見るような格好良いシーンである。彼らは水際と並行に車を停車させ、散歩し始めた。そのうち潮が満ちてきたので、彼らは慌てて車に戻り急発進させようとしたものの、傾斜が付いている砂浜では車輪が砂に穴を掘るだけで、むしろ水際にずり落ちてゆく。一層慌てふためいてアクセルを踏んだがますますずり落ち、とうとう海水に浸かってしまった。

横柄な態度の若者たちの行動をそれまで静観していた智則だったが、へこのままでは沈んでしまう〉と思い、車に近寄り対処しようとした。ところが人数が足りない。

「おい！ その若衆たち、来てくれ！ 手伝ってくれ！ 車を助ける。早く頼む」
そう言つて、近くにいた若者たち四人に声を掛けた。

「早く来てくれ、考えている暇はない！」

若者たちは智則の気迫に押されて砂浜に下りた。

「運転手は君か。俺の言うこと聞か。聞かねば沈む」

智則は車内の二人に言うと、彼らは洪々了解した。

「運転手以外は車外に出よ！ 若衆たち、車の前部を岸辺のほう、水際と逆の方向へ向けてくれ。いいか、一、二、三、それっ！」

車の前部を持ち上げ、陸地に向けた。

「ようし、運転手！ 我々が後ろから押す。アクセルをゆっくり踏め。もつとゆつくり。止まるギリギリまで足の力を抜け。よし、その調子。他の者は海に入り、号令とともに一斉に押せ。一、二、三、それっ！ 押せっ。アクセルは吹かすな」

車は少しずつ岸辺に向かつて動き出した。

「その調子。続けて！」

やっと水面から出た。

「車を止めるな。そのまま砂場を抜けるまで進めよ」

「なんとか助かった。若衆たちありがとう」

智則は手を貸してくれた若者たちに握手して回った。智則は運転手のところへ行き、すぐ洗車場かガソリンスタンドで車を徹底的に真水で洗うように念を入れて言った。彼らのではなくて誰かに借りてきた車のように感じたからだ。車の二人は一応礼を言つて立ち去ろうとした。

「そのまま立ち去るつもりか！ 彼らの格好を見てみよ」

一部始終を見ていた平助が怒鳴った。彼らは渋々財布から三千円を出して平助に渡し、去つて行つた。平助は「はした金じゃが貰つておけ」と言つて智則に渡した。

智則は手伝ってくれた若者たちに頭を下げて礼を言い、自分の財布を取り出して財布の中のお金を全て掴んで渡した。

「少なくとも申し訳ないが、洗濯代に、残りで一杯やってくれ。君たちのおかげで助かった。ありがとう。でも、ずぶ濡れになったな。すまん」

そう言いながら、智則は何度も何度も彼らに礼を言った。

「ずぶ濡れはお互いさまじゃ。上等な靴や衣類だったのやろ」

若者のリーダー格の男が智則に言った。

若者たちは金を受け取ると、その場を去って行った。彼らは暴走族のような町の嫌われ者だったのである。その様子を終始見ていた老人がもう一人いた。彼はかつて侠客と言われていたならず者たちの親分だった。

「あいつの財布はもう空や。何とかしてやってくれ」

「分かっている。彼をお前の元へ連れて行きたいのやろ」と平助が言った。

「分かるか？」

「昔のおまえを見ているようやった。でもあかんぞ、孫娘の婿にするつもりや」

明くる日、前日手助けしてくれた若衆たちが單車で平助の家にやってきた。智則に会いにきたようだ。陽子は心配したが、平助は笑っていた。

「今日は俺たちに付き合ってくれ」とリーダー格の一人が智則に言った。

「分かった」

「俺の後ろへ乗れや」

少し走った後、單車を止めて、リーダー格の男が言った。

「おい、金出せや」

「出してやりたいが空つけつや」

財布をひっくり返した。

「君たちに飯でも食わしてやりたいが、この通りや。すまん。取りあえず貸してくれ。ご馳走したい」

「文無しにおごってもらったら、俺の名が廃る」

「今日は俺が出してやる」

「お前、昨日、財布の中身を全部出したのか？ あきれた奴や。どうして帰るつもりや？」

「今考えてる。アルバイトでもするか？ どこかあるか？」

「知るか、そんなこと。お前、奴らのため、あれだけの金出したのか。馬鹿」

「馬鹿は生まれつきや。それに、俺が君たちに頼んだのや。あの二人が頼んだわけはない。俺が礼をするのが当たり前のことや」

「こんな馬鹿な奴に会ったことない。馬鹿と喧嘩はできん」

智則はその夜、平助の家族と団らんをしている途中、思い出したようにインテリア関係の仕事仲間に電話を入れた。

「急な話で申し訳ないが、明日妹を連れて帰るから、女の子用のシングルベッドや布団の用意を頼む。夕方頃届けてほしい。部屋のパ付けも手伝ってくれるとありがたい」
「智さん世話を掛けますな」と陽子の母親が申し訳なさそうに言った。

「いいえ。他に用意することなかったかな？ 一応寝ることができればいいか。後はぼちぼち揃えるか。何しろ男の一人暮らしなもので…」

翌朝、智則は陽子を伴って大阪へ戻るため、車やカバンなどを用意していた。

陽子は既に用意していた自分の着替えや身の回り品を詰めたカバン、段ボール箱を車に積み込んでいた。積み終わった頃、暴走族のリーダーが寄ってきて、陽子に金を渡そうとした。彼には考えられない行動である。

「俺はあんなけつたいな男に会ったことがない。底抜けの良い奴や。あいつの気風には、この俺も惚れた。俺が惚れてるお前も、あいつに譲ったんや。絶対離れるな。あいつを『兄い』と俺は勝手に決めたのや。奴の財布の中は空だ。大阪へ着くまで面倒

見てやれ」

「ありがとうね。お爺ちゃんからも同じこと言われて預かっているの」

「いいから持っていけ、餞別と思って。奴を離すなよ」

「大阪で何かあったら俺に連絡しろ。俺たちが駆けつける」

「ありがとう」

智則は自分の荷物を積み終えると、車の点検をしてから運転席に着いた。

陽子の家族が口々に「お願いしますね」と挨拶をしていると、あの平助が目には涙を一杯溜めながら「智さん頼むな」と言って、智則の手を握った。車の中の二人は皆に頭を下げ、ゆっくり発車した。

「お弁当持ってきたのよ。今朝から作ったの。美味しいわよ」

「ありがたい。高速道路を使わなければガソリンは何とか持つだろうから、これでお腹も大阪まで持つ」

「智さんは皆に好かれるね。町の嫌われ者の暴走族にまで……」

「そうかい」

「名前は剛というんだけど、あのリーダーからお金預かっているの。大阪へ着くまで面倒見てやれって」

「僕も哀れやな。暴走族に恵まれたのか」

「あの人たち、本当は良い人たちなのよ。智さんを『兄いと決めた』と言っていたわ」
「ハハハ、僕は暴走族の『兄い』か」

「ね、高速道路へ入ろうよ。大阪に早く着くよ」

「うん。せっかくの好意や、そうすることにする」

途中から伊勢自動車道へ入り、亀山から名阪国道へ入った。

「やっぱり早いね」

「うん。助かった」

車は大阪方面へ向かって走っている。

「お爺ちゃんをはじめ家族がね、今まで私を家から出さなかったの。智さん、よほど信頼されたのね。お爺ちゃん、滅多に人を信用しないのに。でもね、一度信用するとトコトン信用するみたい。自分の目に自信があると思っっているのね」

「して、陽子さんは信用してくれるの？」

「さあ、どうかな？ でも、付いてきちゃった。智さん、責任重大よ」

「こりゃ大変だ。年齢だけでも言っておこう。二十七歳や」

「もっと若く見えるわ」

「そうかな。阿呆だから…」

二人は顔を見合せて笑った。

「まだ何をするか決めてないの」と陽子は言った。

「慌てて決めることないけれど、何かしたいことあるの？」

「分らないの。取りあえず仕事を探さなくっちゃ。智則さんの仕事を手伝わせてもらいたいけれど？」と顔を覗いた。

「僕の仕事はすぐには手伝えないよ」

「どうすれば手伝える？」

「少し学習しなければ…」

上野ドライブインへ入って、陽子の作った弁当を食べることにした。

「こりゃ凄いや。随分手間が掛かったろうな」

「そうよ。ありがたく食べてね」

「朝早く起きたんやね」

「うん、今日は眠いわ」

「ありがたく頂く」

そう言って智則は、陽子の作ってくれた弁当を味わった。

「美味しい。陽子さんは料理好きかな」

「お母ちゃんに教えてもらったの」

「良いご家族や。ご厄介になつて、そう思った」

「気に入ってもらつて嬉しいわ」

「食事が終わったらガソリンを満タンにして、大阪までひとつ走りや。陽子さんは寝ていいよ」

「ううん。眠くても、興奮して眠れそうにないわ。智さんを見たり風景を楽しみながら頑張るわ」

車は天理インターチェンジで西名阪自動車道に入り、松原インターチェンジより阪神高速道路へ。そして谷町にあるマンションに到着した。借りている露天の駐車場へ車を置いて荷物を持ち、エレベーターで最上階にある十階の自室へ辿り着いた。

「陽子さんの家に比べたら狭いだろう?」

「なかなか良いところじゃない。前にも言つたけど、私、都会のマンション暮らし、憧れていたの。お部屋も良いし。それに便利そうで…」

「陽子さんの家とは大分環境が違うよ。きつとすぐホームシックになつて、潮の香りや潮の音がする故郷へ帰っちゃうよ」

「帰らないわ。いつまでも智さんにくつついてやるんだから」